

新潟大学

訪問調査対象 プログラム名	新潟大学・長期留学に対するレディネスを身につけるための階層的な短期海外研修プログラム
類 型	語学習得型・教養履修型×選択型

A. 海外プログラムの詳細

【要旨】

- 交換留学に多くの学生を誘引するための海外プログラムの入門編として、5週間のプログラム（カナダあるいはオーストラリアに赴く2種類がある）が設けられている。
- 英語研修プログラムは派遣先大学の既存のプログラムを中心に設計されている。
- 両プログラムとも、テーマに沿って現地の人々へのインタビューに基づき、発表やレポート執筆をすることが組み込まれている。

1. 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

海外プログラム個別の教育目標が明確である

新潟大学には交換留学に行く学生を増やすという方向性があり、そのための入門編として参加しやすいメニューで組み立てたのが本プログラムである。まず1ヵ月強の本プログラムに参加し、そのステップを経て長期の交換留学へという階層を示すことで、その意図を学生により分かりやすく伝えている。

本プログラムは全学年を対象としているが、交換留学へとつなげる意味からも入学後の早い時期、1年生および2年生の参加を想定している。できる限り多くの学生に門戸を広げるために、申請時に英語能力の履修要件などは設けられていない。

本プログラムの教育目標は以下の通り。

（目的）

本プログラムは、新潟大学が全学で推進するグローバル人材育成の一環として、大学における英語・教養・専門教育と相乗効果を持たせた英語研修を中心とした海外研修を学生の英語レベルに応じて階層的に提供し、高い英語運用能力を身につけ、かつ外国に対する抵抗感を低くすることにより、高学年時の交換留学、さらには卒業後の正規留学や海外勤務に対する十分なレディネスを身につけさせることを目的とする。

（達成目標）

カナダ、オーストラリアの協定校等での5週間の英語および教養プログラム（初級者向け）を通じ、海外に対して抵抗のない“Basic readiness”を身につけることを目指す。

2. 海外プログラムの実施状況とその内容

教養や英語スキルの修得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

(カナダ・サマーセミナー)

【実施時期】 8月～9月

【実施期間】 5週間

【実施場所】 アルバータ大学 (カナダ)

【参加学生数】 2016年度 41人、2017年度 34人、2018年度 24人

(オーストラリア多文化共生社会体験プログラム)

【実施時期】 2月～3月 (2019年度までは8月～9月)

【実施期間】 5週間

【実施場所】 クイーンズランド工科大学 (オーストラリア)

【参加学生数】 2016年度 20人、2017年度 19人、2018年度 20人

【プログラムの具体的活動内容】

(カナダ・サマーセミナー)

アルバータ大学が実施する既存の英語研修がベースになっている。新潟大学の学事暦がアルバータ大学提供のプログラムと一部重なるため、新潟大生のためにカスタマイズされている部分もある。

プログラムの開始前にはプレイスメントテストがあり、それに基づいてクラス分けされた上で基本的に午前中は英語の授業が行われる。プログラムの前半は、既存の英語研修プログラム＝Open Programを受講し、4技能の授業を受ける。レベルによって内容は大きく異なっており、上級レベルでは、毎週英語でのプレゼンテーションを課されるクラスもある。プログラムの後半は、新潟大生のためにカスタマイズされた新潟大学仕様のプログラムを受講する。カスタマイズの内容は、カナダの福祉や多民族社会などについて英語でレクチャーを受け、現地の人たちにインタビューをしてまとめ、最後にプレゼンテーションを行うというものである。

午後は日によって異なるが、アルバータ大学が用意するアクティビティ (現地学生との交流、市内見学、大学見学、エドモントンの州議会議事堂の見学、英語の歌を歌う) 等に参加する。カナディアンロッキーへの2泊3日の旅なども用意されている。

現地での宿泊は、前半がアルバータ大学の寮・宿泊施設で、後半がホームステイである。既存のプログラムは新潟大生以外もほとんどが日本人学生であり、寮・宿泊施設では参加する全新潟大生 (年によって異なるが20～30人程度) が暮らすため、周囲がみな日本人という傾向は強い。ただ、いきなりホームステイには気後れする学生もおおり、前半の寮生活と後半のホームステイも大学としては階層的なステップアップとして組み込んでいる。

(オーストラリア多文化共生社会体験プログラム)

クイーンズランド工科大学の既存の英語研修プログラムに参加する。期間中すべて既存プログラムであり、特に新潟大学のためのカスタマイズは行われていない。

オーストラリアのプログラムの最大の特徴は、参加学生が英語研修受講とは別に、特定のテーマが与えられ、それについて現地の人たちにインタビューをすることが課されていることである。このテーマについては、自分たちで決めるのではなく新潟大学の担当教員から与えられる。事前に与えてしまうと、渡航前に日本で準備してしまうことから、基本的に渡航後にメールでテーマを伝えることにしている。

テーマとしては、例えば「サッカーワールドカップ予選の日本対オーストラリアの試合が開催されます。さて、オーストラリアはアジアの国の 1 つだと思いますか？ 思うならそれはなぜですか？ また思わないなら、それはなぜですか？」と問い、これについて 5 人以上のオーストラリア人にインタビューをし、その回答を踏まえて自分はどのような感想を持ったか、理由も含めて帰国後にレポートにまとめるというものである。これは多文化共生社会を体験し理解するという、オーストラリアのプログラムのテーマに沿った取り組みとして位置づけられている。なお参加する学生の所属学部によっては、テーマをよりその学問系統に適したものに変更する場合もある。

3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

事前・事後学習の両方が設定されている

現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが用意されている

現地での学修に関連する事後学習のコンテンツが用意されている

教養系英語科目における 1・2 年次の 4 月の授業冒頭で、本プログラムに挑戦しようという働きかけをしている。教養系英語科目では、一般学術目的の英語運用能力を養成することとしており、その基礎となる一般目的の英語運用能力は、各自が課外での自主学習で強化し、その成果を 7 月の TOEIC IP で測定することとしている。ただし、授業内容そのものと派遣先の既存英語研修プログラムで内容的な連携をとっているわけではない。

なお、派遣後に交換留学につなげるための英語科目はこれまでは設けられていなかったが、2020 年度から TOEFL と IELTS に特化した受験準備科目と、留学先での学修に必要な実践力を養成する中級・上級 EAP(English for Academic Purposes)科目が新設されることになっている。

本プログラムでは、事前学習の場として 3 回以上の事前講義・オリエンテーションを実施する。

「カナダ・サマーセミナー」については、①全員に TOEFLITP (2019 年度は VELC) を受験させ、②同大学が設置している外国語学習支援スペース「FL-SALC」における英会話プログラムへの 2 回の参加が義務付けられている。また、異文化コミュニケーション等についてロールプレイやディスカッションなどのグループワークが事前学習として行われて

いる。

「オーストラリア多文化共生社会体験プログラム」については、英語の申込書類を題材にし、内容はどのようなもので何に同意したことになるのかなどを理解させるためのレクチャーや、オーストラリア英語についてのレクチャーが行われている。

事後学習として、カナダのプログラムについては、①「私にとってのカナダ・サマーセミナー」と題したレポートを執筆すること（日本語 1000 字以上 1200 字以内）、②ホストファミリーやカナダ人の友人、またはクラスで一緒になった日本人以外の留学生と、これまでの人生で最も重要な日について分かち合い、その内容と考察をレポートとしてまとめること（英語 400 語以上 500 語以内）の 2 つの課題が課される。加えて 2019 年度から、経験の共有のために研修成果を 5～6 人のグループワークで振り返り、次の目標設定まで行って発表するという取り組みも行っている。

オーストラリアのプログラムでは、テーマに沿って現地でアンケートやインタビューを行った内容への考察を加えたレポートを帰国後に英語または日本語で執筆する。

4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

海外プログラムの成果を評価する何らかの仕組みがある

プログラム設計の共有、プログラムの修正機能、あるいは次年度への引き継ぎ体制の何れかについての学内コンセンサスがとれている

アセスメントとしては、TOEFL ITP（2019 年度は VELC）の事前事後の受験、自己評価を含む事後アンケートを実施、事後学習としてのレポート内容で判断している。

成績評価は、派遣先大学が行う英語研修プログラムの成績が 50%、レポートを含む事前事後の取り組みが 50%の割合で行っている。

主に事後アンケートによりプログラムの適切性を把握し、次年度以降のプログラム改善に活かしている。具体例としては、カナダの後半の新潟大学の独自プログラムについて「目的が分からなかった」「英語を話す機会が減った」などのアンケート結果を踏まえ、アルバータ大学に働きかけてカナダの福祉や多文化社会について取り上げるように変更し、プレゼンテーションも取り入れられるようになった。

5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

カナダ、オーストラリアの両プログラムとも、卒業必要単位として 4 単位が認定される。

また JASSO 対象外となる学生のうち、別途定める要件を満たす学生に対して、新潟大学基金より 5 万円が給付されている。ただし併給はできない。

同大学ではクォーター制が採用されており、夏期休暇中のみ実施されていたオーストラリアのプログラムが、第 2 クォーターにも実施されるようになっている。

6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

本プログラムの修了学生のうち、2016年度～2018年度には毎年3～7人が交換留学に行っている。また、本プログラムの修了者には交換留学や授業外の英語学習プログラムについて、全学生への告知以外に個別に告知し、交換留学への働きかけを行っている。

B. 学生インタビュー

1. 新潟大学学生1（人文学部心理専攻3年）

(1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

小学生の頃より英語との接点が多く、英語を学ぶこと、英語を使って海外の人々と話すことを楽しんできた。小学校の低学年から中学3年生まで英会話教室に通っていた。幼い時から英語学習に力を入れていた。そのせいか中学生の頃、自分が話す英語を先生に褒めてもらって嬉しかった記憶がある。高校に進学すると、TED (Technology Entertainment Design) のプレゼンテーションの映像を使った授業があり、高い関心をもって英語プレゼンテーションを学んだ。また高校の友達の家が海外からの留学生のホームステイ先になっていて、そこに来た欧米圏やアジア圏から来た留学生たちとの会話を楽しんだ。海外への渡航は、高校の修学旅行で台湾に行ったのが最初である。現地の高校生たちとゲームなどをして楽しんだ。コミュニケーションは、知っている英単語やジェスチャーなどを使って行った。

大学に入学してすぐ、英会話研究部に所属した。これには海外から来た留学生も一員となっており、英語でディベートやビブリオバトルにチャレンジしたり、英語での映画鑑賞をしたりと、様々な形で英語コミュニケーションを楽しんできた。

このように小学生の頃より英語と親しみ、学ぶことを楽しんできたことから、大学に入学したら必ず海外プログラムに参加してみたいと考え、入学後の5月に学内で開催された留学説明会に参加した。そして、留学説明会で紹介された海外プログラムが魅力的に思えたこと、周囲に同じように留学を希望する友達が多くいたこと、さらには履修していた講義で異文化に触れる機会があり、そのことで異文化に対する興味が強くなったこと、こうしたことから海外プログラムに参加したいという気持ちはさらに強くなった。

そして「長期留学に対する階層的な短期海外研修プログラム (オーストラリア多文化共生社会体験プログラム)」に参加することを決めた。このプログラムを選んだのは、英語圏であったこととホームステイができるからである。かねてより周りに日本人がいない環境で生活してみたいと考えていたので、ホームステイを是非体験してみたかった。

(2) 参加した海外プログラム

36日間実施された海外プログラムは、平日はクイーンズランド工科大学（QUT）附属語学学校での英語学習（8:30-16:00）、ただし金曜日は午前中のみ（8:30-9:50）、土日は休日として自由に過ごしてよいというものであった。

授業の内容は、QUT への入学を目指す学生のための英語講座と IELTS 対策の講座とで構成されていた。また何度か課外活動として校外で学ぶ時もあった。ネイティブスピーカーのいないクラス（8カ国の出身者で構成）であったせいか、先生はゆっくりとした英語で指導してくれ、わかりやすく困ることもなかった。ただ大学の図書館にいた時に学生に英語で話しかけられて、聞き取れず悔しい思いをした。

ホームステイ先では、ホストファミリーとの会話は、特に渡航した最初の頃は事実を端的に伝えるような最低限度の会話はできたが、思っていることを自由に発することはできなかった。語彙力の拙さと間違ってしまうことへの恐れとがあったためだと考えている。渡航1週間が過ぎた時にホームステイ先を変更してもらい、子供2人のいる家庭に移った。その家庭では子供が積極的に話しかけてくれたこともあり、少しずつ話すことにも慣れていった。滞在終盤には、間違っている、ゆっくりでも、言いたいことを伝えようという態度に変わっていった。

土日の休日は、語学学校主催のツアーに参加したり、友達と外出したりして過ごした。学校主催のツアーでは、近隣の島に出かけてシュノーケリングやサンドボードを楽しんだ。また大学周辺の案内をしてくれたこともあった。友達との外出では、語学学校で知り合った韓国、スペイン、タイなど多様な出身国のメンバーでランチを食べたり、授業の話などとりとめない会話をしたりして楽しんだ。

渡航後に新潟大学から「オーストラリアはアジアに属する国だと思うか」という問いについて現地に住む5人以上の人にインタビューし、レポートにまとめるという課題が与えられた。自分は、ホストファミリー、語学学校の先生、図書館のインフォメーションセンターで勤務する人にインタビューした。インタビューではあらかじめ英語での質問の文章を考えて臨んだ。

(3) 事前・事後学習について

事前学習は3回程度あり、オーストラリア文化に関する事前知識として、例えばオーストラリア英語や貨幣、ライフスタイルなどについて講義を受けた。現地の生活に慣れる上で、英語の聞き取り方など大変役に立った。また、フライトに関する事前学習（持ち込み禁止物など）やホームステイ先との連絡のとり方についても指導してもらった。

事後学習として、渡航先で課された課題レポートを作成した。インタビュー結果をまとめ、そこに考察を加えることにより、オーストラリアという国をより深く理解することができた。またインタビューそのものも、現地の人々との交流のきっかけにもなり、やりがいのある課題であった。レポートはA4用紙2枚にまとめた。

(4) 成長を感じる点

海外プログラムへの参加を通し、異文化対応力、語学力・コミュニケーション力そして積極性が身についたと感じている。

異文化対応力については、現地の社会や人々の考えを知ることを通じて、現地を理解しそれを受け入れる姿勢が身についたと感じている。現地が銃の所持が許されている国であることや、海外から見た北朝鮮のミサイル問題は自分が思っている以上に危機感を持って受け取られていると知ったこともその一部である。

語学力・コミュニケーション力については、外国人との英会話に臆することはなくなったと感じている。帰国後、留学生が多く履修するような科目を履修するようになり、授業中やグループワークなどにおいて、自分の意見を英語で積極的に話せるようになった。また英語を使って様々な出身国の留学生と分け隔てなくかかわるようになった。今まで留学生と話す時には英語圏の人々に偏っていたが、アジア出身の留学生とも積極的に会話できるようになった。

積極性については、留学生のサポート、例えば留学生が部活動やサークルに入りたい時の橋渡し役を自ら買って出るようになった点で少しずつ身につけてきたと感じている。

(5) 満足・不満足な点

満足していることは2つあり、1つは様々な国の人々とかかわることができ、異文化、多様な価値観に触れることが出来たこと、2つめは、語学力だけでなく、その他にも積極性など多くの素養が身についたことが挙げられる。

満足できなかったことは、1つは留学期間36日間というのは英語の上達を感じるためには短く感じたこと、2つめは自分はスピーキングの力を伸ばしたかったが、授業がリーディングとライティングが中心で日本とあまり変わらない内容であったことが挙げられる。ただし授業については、ディスカッションが多く盛り込まれていた点には日本との違いを感じた。できることなら、ディスカッションやプレゼンテーション、対話などが盛り込まれていればよかった。

6) 今後の学修

3年次に渡航期間4カ月のニューブランズウィック大学（カナダ、UNB大学）への交換留学に行った。この交換留学に行くことを決めた理由は、本プログラムを終えて、より一層英語を上達させたいという気持ちと、異文化に触れることで視野を広げたいという気持ちが強くなったからである。

特に英語のさらなる上達については、専門科目を学び進めている上で、英語の論文を多く読む必要があること、プログラミングで英語が必要なこと、英語による講演があったりすることから強くその必要性を感じている。

UNB 大学への交換留学に行って、海外の人々と英語で会話できる自信が付き、純粋に会話を楽しめるようになった。今後は就職活動を頑張ろうと思っている。空港関連の仕事など英語力を活かせる仕事ができたらと考えている。

2. 新潟大学学生 2（経済学部経営学科 3 年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学入学前までは、ALT の授業があった程度で、海外渡航や異文化に触れるような経験はない。他の科目と比べると、英語は最も熱意と時間をかけて勉強してきた科目で、本を読んだりするだけでなく、英語を使って人とコミュニケーションをとってみたいという漠然とした思いは入学前から持っていた。新潟大学を選んだ理由の一つに、協定校が多いということもあった。

大学 1 年生の間は、留学に挑戦することよりも、基礎を固める時間だと考えて、iStep という週 8 コマの授業で集中的に英語力を高めるプログラムに参加した。ただ、実際に海外に行ってみたら、意外に英語力がなくてもなんとかなりそうだったので、準備に時間をかけるよりも、まずは行ってみるの方が大切だと感じた。

ホームステイに興味があったのだが、一方で寝食をともにすることに不安もあって、カナダ・サマーセミナーであれば、大学を介しているのも制度面で支援されながら、現地の生活を経験できるのがいいと思った。また、以前からフランスに憧れがあって、カナダであれば、フランス語やフランス文化に触れる機会もあるだろうという期待もあった。

（2）参加した海外プログラム

カナダのアルバータ大学での 1 か月間の語学研修で、現地での生活は、前半が寮、後半がホームステイだった。授業は、リスニング、文化を学ぶ授業、会話中心の授業など目的別に分けられていて、それぞれレベル別に振り分けられていた。日本での英語の授業よりも、話す量が圧倒的に多く、教室の外に出てアルバータ大学の学生にインタビューしたり、キャンパスの外に出て街の人にインタビューしたりする授業もあった。教室の中でも教員が一方的に話すのではなく、学生が分からないことがあったら随時質問するという授業の受け方の違いにも驚いた。

授業以外では、ロッキー山脈へのツアーや、とうもろこし畑・ひまわり畑の迷路の散策などを楽しむ中で、日本とのスケールの違いを感じた。いろいろな国の学生も一緒だったが、日本人が多いので、他の国の人との交流はあまりなかった。

（3）事前・事後学習について

サマーセミナー参加者は、図書館の FL-SALC という外国語学習支援スペースで新潟大学に来ている留学生とコミュニケーションをとるという課題があり、昼休みを使って 1 時間

程度、3回ほど参加した。これが、ほぼ初めて海外の方とコミュニケーションをとる経験だったが、楽しんで勉強できた。参加後は、話した内容や、自分の課題を振り返るまとめを作成して提出した。「これなら留学しても大丈夫だ」という自信にもなったので、よかった。

留学後は、振り返りシートがあって、学んだことを報告したり、自己評価したりした。この振り返りを作成する中で、もう1度留学をしようと思えたのでよかった。また、TOEICも受験した。以前受けたのは入学直後ぐらいでリーディングのスコアが高かった。留学後はリスニングが上がったが、トータルではあまり変わらなかった。

(4) 成長を感じる点

語学力としては、会話するというよりも、リスニングの力が身についたと感じる。初めは理解できなかったスピードも、ある程度理解できるようになったし、聞き取れなくても推測できるようになった。授業でビデオを見るときは、最初は早すぎたり、人によってリズムが違ったりして戸惑うことがあったが、終わる頃には、教科書のようなちゃんとした読み方でなくても、聞き取れるようになった。

また、初対面の外国の人とも、抵抗感なく話ができるようになった。授業中に、他の国の学生と話すなかで、少し違和感があっても「それは、その国の文化」として受け入れることができるようになった。自分の許容範囲が大きくなったと感じる。

(5) 満足・不満足な点

満足できなかったのは、日本人と一緒にいる時間が長いので、英語を話す時間が短くなってしまふところ。友人と「英語を話そう」と自分たちでルールを作ったが、日本人とは日本語で話しているほうが楽しいので、甘えてしまった。

満足な点は、「安心できる」ということが一番大きかった。

(6) 今後の学修

留学中にTEDトークのプレゼンテーション動画を見ながら、内容を読み取って、感想をまとめるような授業があって、それで力がついたと思うので、日本に戻ってからも、そのような英語の授業を積極的に履修するようにしている。プレゼンでの話し方や、教室外に出てアンケートやインタビューをするといったことは、ゼミなどで役立っているが、学部の専門の授業とはあまり直結して考えたことはない。

周りの環境が、がらりと変わったときに自分が適応できるか分からなかったが、サマーセミナーを経験して大丈夫だと思ったので、今年、フランスへの留学にチャレンジした。フランス語が話せるというレベルではなかったが、大学4年間で、学部のゼミでもやりたいことはあるので、短期間でフランス語を身につけようと考えて、5か月間の交換留学で、フランス語でフランス語を学ぶ方法を選択した。サマーセミナーの経験があったので、何かあったら英語でなんとかかなるだろうと思っていた。現地で一緒に勉強していたのは、フランス以

外の国の人で、英語が使える人も多いので、フランス語で分からないことは英語で話して助け合っていた。

就職先も、いろいろな言語を使えるといいと思っている。絶対に海外に行きたいというわけではないが、行くことになっても大丈夫なぐらい、楽しめるぐらいにはしておきたい。新しい言語を学ぶことで、言語からその国の文化が見えるし、日本語を相対的に見られるという発見があって楽しいので、海外に行かなくても、いろいろな言語に触れてみたいと思っている。まず、今年は韓国語を勉強する予定。

3. 新潟大学学生 3（経済学部経済学科 3 年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

入学までに海外旅行に 6 回行き、高校の修学旅行ではイギリス・ロンドンに行った。そこで文化の違い、歴史の違いなど海外に関心を持った。

また、高校時代にケンブリッジ大学で英語研修があり、ケンブリッジ大学生と交流したが、自分の英語力の無さを実感した。そこから新潟大学は単位互換で、留学しても 4 年で卒業できるので、できたら長期留学したいと思って入学した。2 年生の夏まで部活が忙しく海外とは無縁だったが、部活を辞めて時間ができ何をしようかと考えたとき、留学があった。

最初から長期留学も考えたが、いきなり長期は難しいとも思い、まず短期留学することにした。海外旅行は趣味で、いろいろと行く国でコミュニケーションするが、英語力が必要と感じていた。

カナダのプログラムで重視したのは異文化体験。特にホームステイができることが大きかった。1 カ月の期間では英語力向上そのものは期待していなかった。

（2）参加した海外プログラム

カナダでは前半が寮生活、後半がホームステイだった。午前は既存のプログラムでレベル別の英語の授業があり、15 人クラスの 9 割が日本人だった。カナダについて学ぶ授業もあり、人数は 15 人くらいで外国人学生と半々の比率だった。午後は新潟大学生のために行われる授業のため、一番英語力のレベルの低い学生に合わせた授業となった。グループに分かれてカナダのことを学ぶ授業で、ガレッジセール等に行って体験してみたり、そこでインタビューしたりして最後に振り返ってプレゼンをする授業だった。こうしたアクティビティでは、自分が常に前向きで積極的でないと英語力は向上しない。インタビューも自分が動いて聞くことが重要だと実感した。

前半の寮生活では新潟大生同士と一緒に住んだので、英語は皆無だった。新潟大生で集まって飲み会をよく開いた。後半のホームステイは、ホストファミリーと一緒にいろいろなところに連れて行ってくれた。このホストファミリーとの関係が 2 度目の長期留学につながった。

ホストファミリーのお母さんに次の留学の相談をし、次回もその家にホームステイするなら食事抜きで半額程度にしてくれるという話になり、長期留学に行く気持ちが固まった。経済学部では卒論がないので、留学をしなかったら大学で何もしなかったことになるという危機感もあって決めた。

長期留学は学内で TOEFL480 点以上が目安とされ、自分は 500 点だったし、同じ大学で同じホームステイ先なので何とかなるだろうと考え、2 年生の 2 月から 10 カ月間の交換留学に行った。経済学を学ぶ留学で、最初 3 カ月は英語スクールに通った。経済学の授業を受けるには英語スクールの一番上のクラスでなくてはならないので頑張った。

それでも経済学の授業は難しく、日本ですでに履修したマクロ経済学やミクロ経済学をカナダでも履修したが、テキストは理解できるが講義は 8 割くらいしか理解できず、チュートリアルはあまり内容的に参加できなかった。

(3) 事前・事後学習について

本プログラムの事前学習としては、外国語学習支援スペース「FL-SALC」のディスカッションに 2 回参加し、その内容の英語でのレポートが課せられた。また、TOEFL 受験が必須で、その点数をもとにカナダでクラス分けされた。

事後学習としては、日本語でのレポート、英語でのレポート、日本語で報告書作成の 3 つがあった。

(4) 成長を感じる点

このプログラムで TOEIC のスコアは上がらなかったが、英語を話すことに抵抗がなくなった。また英語学習への取り組み方が変わった。以前は「読む」「書く」を重視していたが、コミュニケーションツールだと実感し、「話す」「聞く」に取り組むようになった。自主的に「FL-SALC」にも行くようになったし、リスニングは TED をユーチューブで見てまとめるなどして自学自習もした。

また異文化への受容力ができたと思う。英語力はないが相手の価値観を受容し傾聴して、それに対する自分の意見を伝えられるようになった。

(5) 満足・不満足な点

満足していることは、本プログラムの寮生活で学部を越えた友人を作ることができたこと。長期留学を考える良い機会になったこと。満足できなかったこととしては、日本人同士が固まってしまい語学向上には有意義とは思えなかったこと。

(6) 今後の学修

現在、就活中だがグローバルに活躍したいと思うようになり、商社、物流など海外接点の多い企業を主として探している。